

であり、本村も江戸期から煙草栽培、次いで養蚕と商品作物が導入され、雑穀、麦豆との複合がなされ不利な自然を克服したかにみえたがその発展は養蚕までで、絹ののび縮みと共に本地域は停滞性を示し始めたといえる。即ち養蚕一部門に依存度大となりすぎ、新時代に即応できる周囲の経営部門分化から取り残された地域である。この場合自然の不利は大阻害因子であり、近隣、高冷地などの特殊な経営をのぞき、一般農村にもその傾向はあるが、本地域は特に強く現れている。その矛盾を農業経営内部からの解決が遅れているのも問題である。経営規模の委細性、経営の粗放性と共に、停滞性もしくは後進性が非常に顕著であることは以上より述べることができる。

東関東の後進農業地域の地理的考察

— 茨城県東茨城郡旧石崎村を中心として —

河 口 登 志 子

卒業論文を書くにあたっての、初期の目的は日本の農業を、もつとも本来の姿で把握したいということであった。調査を進めるうちに、地理の方面から農業を見るには、現在ある農業の性格を知り、かつ、その地域性、つまり自然、社会、経営等の諸条件の中に、その性格を生み出す原因を探つてゆくことが中心となるべきではないかと考えはじめた。

調査地域として選んだ茨城県東茨城郡旧石崎村は、典型的な東関東の後進農業地域であり、主としてこの後進性（つまり、農業本来の性格である自給自足的、閉鎖的性格からの脱出が十分でないこと）を生み出し、かつ持続せしめているものは何かについて考察を進めた。

全体は4章よりなり、才1章概説および才2章地形と土地利用は、才3章農業および才4章総括で示した、地域の農業の性格を知るための方法として取り扱った。

調査地域は関東平野の東北部、茨城県東茨城郡茨城町に属し、半鹹湖である酒沼北岸に位置する。地形は酒沼川および酒沼の縁辺部に沿う沖積低地とその北部に急崖を成して接する洪積台地に大別される。沖積地は標高0~7mでさきわめて低平であり、酒沼の上流および下流部に分布するデルタと、その先端の干拓地の部分を除いて非常に発達状況が悪い。台地面は標高30m前後の平坦な地形で水に乏しい。台地構成物質は洪積期の成陸性堆積物質である砂礫層の見和層（成田層に対比される）であり、その上を2~3mの層厚を持つ関東ローム層が覆っている。特殊な気候条件としては夏期の降水量の少ないことがあげられ、夏期作物の作種決定に大きな影響を与えている。

産業構成の面を見ると、全産業人口の八割を農業従事者が占め、純農村地帯であることがわかる。東京から100Km、水戸から10Kmの距離に位置し、この距離が特殊作物を持たないため、東京の遠郊農業地域としては成立せず個人による水戸市場への蔬菜出荷の労力負担を高め、水戸の近郊となる要素も蓄めている。土地利用は、台地の畑と低地の水田が基本的なものであり水田は全域排水不良のため一毛作田となっている。かつては台地上の大半を占めていた平地林は次第に開かれ、傾斜地に多く残っている。集落は、自然発生のもは台地縁辺部や低地のうちの微高地に密集し、明治以後の開拓部落は、台地の中央部や干拓地に分布している。

第三章農業では、とくにこの地域の農業に関連の深い事象、災害、干拓地等を取りあげるとともに、農業経営の性格説明のため、専業率、機械力および畜力の導入状況、作物の商品化率等から、自給自足性の説明をおこなった。地域の中心作物は水稲のほかに、夏の甘藷、落花生、陸稲、冬の大小麦が中心であり、蔬菜類は年間を通じて、全作付面積の5%内外に過ぎない。平均1.7町という耕地面積の大きさは、豊かさを表示するものではなく、近接する水戸市に工業都市としての性格の少ないことと、交通の不便から、地域内にとどまつたまま兼業をおこなう枝会は少ない。機械力、畜力の導入もこのような事情から遅れている。また、各部落別に経営内容の差を見て、経営変化の地域への浸透の状態を調べた。せまい地域内でのことであり、断定的な結論を下すことは不可能だが、一般的に畑作地域がやや進歩的であり、米作地域の収入の安定は、むしろ現状維持にかたむく傾向を持つことがわかる。とくに開拓部落の項を設けたのは、農業における人為的要素の果たす役割が見逃せないことに気づいたためである。たしかに地理的諸条件の悪さはあつても、地域の停滞性の原因をすべてこれから説明するのは危険であろう。人為的に改善する余地は十分に残されていると考えられる。

第四章総括は、以上から示される農業の姿のいつそう明確な把握のために設けた。つまりこの地域は、外的には大消費地からの遠さや交通条件の悪さにより、経済的、社会的刺激を受けにくく、また内的には地形および気候等から、あるていどの作種の制約を受け、単純な穀物中心の輪作形式に依存している。だが、直接にはないが、外部から他産業の労力需要の高まりの影響を受け、最近の全国的な傾向である若干労力の減少傾向が見られる。したがって、現在続行中の干拓地による耕地の絶対的増加と、労力減少による相対的増加により、現状のまゝでも、一定の安定は保証されることになる。外部からの経済的刺激的の少なさは農民に現金収入増加への真欲を欠かせ

また、長年にわたる単純な輪作形式に馴れているため、蔬菜栽培等による生活の変化は、経済的不安定さへの恐れとあい併って容易なものではないだろう。この地域が変化するには、まず、交通条件等の変化により外部との関連の密接になることが必須の条件であり、他律的な農業の性格から考えても、内部からの変化は緩慢なものに過ぎないと考えられる。

秩父盆地東南部に於ける養蚕業の地理的考察

神田 昌子

1. 研究目的

本年度卒論の方針「地形と土地利用」は一応の基本線となっており、その他に新たなるテーマを出してもよいとのことで、我が郷土埼玉県の西部に位置する秩父盆地東南部の地形と土地利用を研究すると共に、この地域の土地利用の一大特色である桑園を発展させて、養蚕業の考察を試みた。従って次の二点を目的とした。1、養蚕中心にみた秩父東南部の地域性の把握。2、秩父養蚕業の現状、将来の把握。勿論両者は全く別のものではなく、2を知ることによって1の把握が出来るわけであり、主たる目的は1にあるわけである。およそ、地理学の目的は「地域性」の把握にあると我流なりに納得したためである。

2. フィールド

何よりも地理的に興味のあることが地域設定にあたっての第一義的条件となる。その他調査に便利であること、地域的まとまりのあることなどを考慮した上、本フィールドを選んだ。

本フィールドは秩父市を中心とし、荒川が中央を流れて見事な河岸段丘地形を呈している。又、日本地質学の故郷と呼ばれるごとく、秩父古生層の分布がみられ、歴史的にも様々な話題をもっている。産業に於いても古い歴史をもったものが多く、最も中心となるべきものが秩父養蚕であり、秩父地方の開発は絹の発展と共に進められたといっても過言ではない。現在、その絹も大分衰えてそれに代る合成繊維の拾頭が著しいが、農業に於いては依然として養蚕中心といった状態である。が盆地としてとざされたこの地域にも近代化、都市化の波が押しよせており、工業の示める地位は今々養蚕をしのいできており農業に与える影響も大なるものがある。

3. 地 形

秩父盆地が侵蝕盆地であるのか断層盆地であるのか明らかでないが、盆地内には荒川により形成された三段の河岸段丘が見られる。上位段丘はかなり